

# 戦災慰霊碑のデザイン-イサム・ノグチの広島平和記念公園— Design of Memorial to War -Hiroshima Peace Memorial Park by Isamu Noguchi

今村友里子  
Yuriko Imamura

舞鶴工業高等専門学校 建設システム工学科, 助教, 博士 (工学) (y.imamura@maizuru-ct.ac.jp)  
Research Associate, the Department of Civil Engineering and Architecture, NIT, Maizuru College, Dr. Eng.

本稿は戦災を人による災害の最たるものであると捉え、戦災復興における景観構成の一部としての慰霊碑制作手法を提示することを目的としている。そのため第二次世界大戦からの復興と平和の象徴である広島平和記念公園に着目し、これまで一つの風景としては評価されずにいたイサム・ノグチの広島での2つの制作「原爆慰霊碑の試案 PROJECT FOR MEMORIAL TO THE DEAD (1952)」および「広島の中の二つの橋 TWO BRIDGES FOR HIROSHIMA (1951-52)」を全体的に考察した。その結果、「循環」という超越的な働きを造形によって示すことによって場所に新たな意味を与え、既存の風景が失われた場所を人が生きられる場所としての新たな風景へと転換するという全一的景観構成手法を明らかにした。

慰霊碑, イサム・ノグチ, 丹下健三, ヒロシマ  
Memorial, Isamu Noguchi, Kenzo Tange, Hiroshima

## 1. 序

戦災とは人災の最たるものである。そして戦災で亡くなった者の霊を慰める慰霊碑は、戦災の恐ろしさを伝えるだけではなく、戦争なき未来を祈念して建設される。それは戦災からの復興の象徴となる。

本稿では、第二次世界大戦で原子爆弾による未曾有の被害を受けた広島にて復興の象徴とされた平和記念公園に注目する。現在公園内に設置されている鞍型アーチの原爆慰霊碑は丹下健三(1913-2005)による設計であるが、その計画の過程では慰霊碑の試案をイサム・ノグチ(1904-1988)が制作していた。ノグチの原爆慰霊碑及び慰霊碑を含めた公園全体の構成を考察することで、災害復興における景観構成手法の一例を示す。

## 2. 丹下案とノグチ案

ノグチ案を考察する前に丹下案について概観しておこう。丹下案とは、軸線による景観全体の秩序づけと(図1<sup>注1)</sup>)、視線を誘導し原爆ドームを象徴化する手法によって(図2<sup>注2)</sup>)、焦土と化した広島に人間が定位可能となる新たな根拠を導入する手法であった。丹下がデザイン

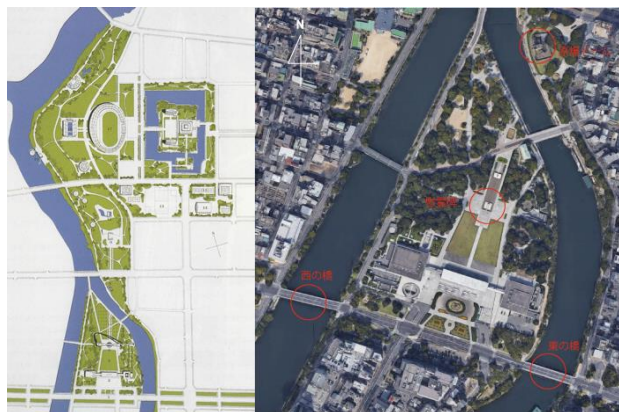


図1 丹下案(1950)

図2 現状の平和記念公園

した原爆慰霊碑はその全体構成の中で軸線を示し、原爆ドームへの視線を誘導するゲートとして機能している。

この丹下案に決定される以前に計画されていたのが、ノグチによる「原爆慰霊碑の試案 PROJECT FOR MEMORIAL TO THE DEAD (1952)」である(図3<sup>注3)</sup>)。慰霊碑の全体は、地上に見えているアーチ上の塊と、その少し手前から階段を使って降りる地下空間とで構成されている。

さてこのノグチ案について、藤森照信は実現しなくてよかったとの評価をしている<sup>注4)</sup>。その理由としては、地上部分の高さが5mほどあるノグチ案を丹下の軸線上に設置した場合、肝心の原爆ドームへの視線を遮ってしまうからである。確かにノグチの案は丹下の全体計画の中で考えたときには、最善とは言えないであろう。これは環境全体を彫刻と捉えていたノグチにしては珍しい過ちであると言えようか。しかしながら、平和公園をめぐる全体構成についてノグチ自身に別の思想があったと考えてみたらどうか。

## 3. 広島の中の二つの橋

ここで注目に値するのは、ノグチが慰霊碑に先行して計画した「広島の中の二つの橋 TWO BRIDGES FOR HIROSHIMA (1951-52)」である。これは中洲状の平和記念公園を挟んで流れる二つの川にかかる、東西でデザインの異なる二つの橋である。平和記念公園へとアクセスする平和大通り上にある(図2・図4<sup>注5)</sup>)。丹下健三と当時の広島市長の要請によるもので、平和記念公園の構想と時期を同じくして計画された。<sup>注6)</sup>

東側の橋は「ツクル」と名付けられ、「建てること」と「生きていること」を象徴する。西側の橋は「ユク」と名付けられ、「出発すること」と「死ぬ」ことを象徴する。このように橋には生死の問題が重ねられている。

さて、この橋の形状が太陽信仰の古代エジプト船を思い

起こさせるように、その配置もまた太陽が昇り沈む東西の方向と一致する。太陽と生死、二つの象徴を重ねて考えるならば、太陽が東から昇り西へと沈むまでの動きが生（ツクル＝東の橋）から死（ユク＝西の橋）までの不可逆的な運動の象徴であると理解できる。ならば東の橋と西の橋の間にある平和記念公園の場所とは、生きて死ぬという刹那的な運命の中であらゆるもの全てが生きる場所の象徴に他ならない。戦災があれば失われる儚い生ではあるが、太陽は西に沈んだ後に再び東から現れることとなる。

#### 4. 再考：原爆慰霊碑の試案

再度慰霊碑の案に注目しよう。地上部分は黒御影石でできたアーチ状の塊である。この黒御影石塊は丹下案のアーチと比べて明らかな重量感を持つ。黒御影石アーチは下から炎によって照らされ、上からは太陽光で輝くよう意図されていた。アーチが地下へと延長するような形でコンクリート脚部は地下へと降り、地下の空間を支える柱となる。地下の空間では柱の間の壁から突き出すようにして御影石の箱があり、その中には原子爆弾による犠牲者の名前が納められる計画であった。

ノグチは地下について「それは近親を奪われた者への慰めの場所になるはずで—そのうちに犠牲者に取って代わるであろう未だ生まれていない世代のための子宮を連想させる」<sup>注7)</sup>といい、「(私たち全てが還る) 大地の下のほら穴」であるという。還り、生まれてくるとの言葉から、ノグチにとっての生死の問題は循環のイメージで捉えられていることがわかる。そして地下とは、あらゆるもの全てが還り、あらゆるものが生まれ出づる根源的空間で

あり、万物の生々流転の基盤となる空間となっている。

ノグチは「私はエネルギーの集中として彫刻を考えた」と言う。この「エネルギー」を、ものが現れて消えていくという循環そのもの、一切を生み一切を無に帰す大いなる働きそのものであると考えるならば、慰霊碑とはこの働きを指し示すサインに他ならない。ノグチの慰霊碑が地下から地上へと向かいまた地下へと戻る大きく重いアーチ形をしていることも、循環を示す形状として理解することができる。

#### 5. 広島平和記念公園における全体的景観構成

橋と慰霊碑、二つの作品を通して考察すれば、生死の橋の間に慰霊碑を中心とする平和記念公園があることに気がつく。さらに二つの共通項として、循環という働きの超越性によって生の場所として平和記念公園が意味付けられているというダイナミックな構成に気がつく。

ノグチはこの二つのプロジェクトを通して広島という場所を、原子爆弾の被害を受けた悲惨な場所というイメージから、生と死が輪廻転生のごとく循環する中での生の場所というイメージへと転換することを試みていたといえよう。そこは「ツクル」という言葉が示すように、ものが現れる場所である。つまりノグチは、慰霊碑制作を通して場所に新たな世界観を与え、焦土と化した実際の見えを新しい意味の風景へと転換することを意図したと言えるだろう。そしてそれは、単に死者の慰めや被害を記憶するための慰霊ではなく、これからの未来のために生きられる場を開こうとする眼差しであった。

#### 6. 結

広島平和記念公園の原爆慰霊碑とその基盤となっていた景観構成についてノグチ案を考察した。現状の広島平和記念公園を構成している丹下案とは、都市計画的な手法でもって破壊された町の中から原爆ドームを見出し軸線を通すことによって新たな都市構造を与えるものであった。それに対しノグチ案とは、破壊された広島の風景を、生と死の循環する風景へと捉え直すことで、人が生きられる場所を開こうとするものであった。ノグチの橋と慰霊碑を全体的な一つの構成としてその意図を捉えようとする研究は意外にも少ない。このことが丹下の軸線という秩序の中での評価をされた場合に、未実現もやむなしとされる所以であろう。以上考察を通して、災害以前の既存の風景が破壊され尽くした場合における景観構成手法の一例を示すことができた。

注

注1) 丹下健三・藤森照信『丹下健三』新建築社、2002、146頁

注2) google map に著者加筆

注3) Isamu Noguchi, *A Sculptor's World*, Harper & Row Publishers, 1968, p.201

注4) 丹下・藤森、前掲書、153頁

注5) Noguchi, *op. cit.*, p.198

注6) 橋と慰霊碑の制作における時系列的な整理は、腰前俊也「イサム・ノグチの《広島死没死没者記念碑》案—その制作期間と起源について—」『文化学年報 第六十二輯』同志社大学文化学会、2013年3月、296-319頁が詳しい。

注7) 以下ノグチの言説の引用は全てNoguchi, *op. cit.* より。



図3  
「原爆慰霊碑の試案 (1952)」



図4  
「広島の中の二つの橋 (1951-52)」  
上：東の橋  
下：西の橋